

ハイアット
末路兄弟



PLUMERIA

末路の始め

はじめまして、PLUMERIAです。

本作品は、コミティア96で無料配布したDRAGON（逆さ文字）の電子版です。

今回、掲載するにあたり、冒頭の紹介四コマを書き直し、また本編に加え、書き下ろしとなる末路＞末路を追加させていただきました。

内容は残虐性が含まれますので、あらかじめご了承ください。

感想等ありましたら、下記サイトのメールフォーム等をお願いいたします。

[創作サイト「PLUMERIA」](http://plumeria.dayuh.net/) <http://plumeria.dayuh.net/>

それでは、どうしようもなく末路な兄弟の物語を少しでもお楽しみいただければ幸いです。

2011/10/某日



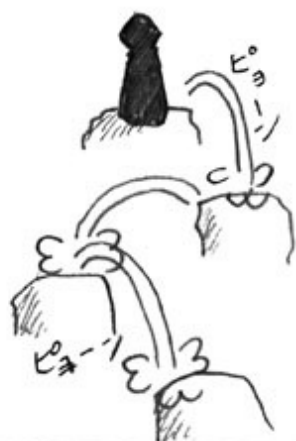


鎖がボクの武器です

インギルド
道士は協会から仕事をもらいます

山石塚も軽々です。

兄さんに障害など
ありません



登るのも一苦労します

でもボクは兄さん
みたいには行かないので



離れがれになることが良くあります。

あれ？

置いて
いかれます。



兄さん、早いなあ

すーい

いつもの
ことです。



森の中は特に迷子になりやすいです。



兄さん発見！、毎日、ゴインは兄さんが用意してくれます。



へえ、兄さん

……



次の仕事はオールド
ボウが協会に

取りに入っても良い？
いつも兄さんが行っているし

オールド
協会は大きな町に窓口を持っています。



良いで、兄さん

……めかった。
だが

兄さんはとても心配性です。



知らないやつと話すな

はーい
知らないやつについて行くな

すぐに戻ってこい

本編につづく

はーい

鈍い音が響き渡った。

さびたネジが軋み、辛うじて残った塗装が塵となって剥がれ落ちる。開いた隙間から風が吹き込み、シミを描く壁に貼り付けられた紙を揺らした。

それほど広いともいえないが、十数人が集っても息苦しさを感じない程度には面積を持つ部屋。

部屋というよりも、空間と言ったほうが正しいのかもしれない。

その建物の内部を仕切る壁はない。入り口の正面にはカウンターがあり、擦り切れた分厚いファイルが置かれていた。

所狭しと並べられた机と椅子は、ずっと昔に買い揃えて以来、新調などしていないのだろう。幾つかの椅子は足が掛けた状態で、背凭れには大きなヒビが入っているものまであった。

そして、壁一面には手配書。東西南北――各地より集められた人相書きが室内にいる者たちを睨みつける。

唯一、紙が貼られていない窓は汚れて曇り、外の様子を窺うことができない。

室内には複数の人影があった。

誰も彼も、厚い鉄や革で身を包み、鋭く光る武器を腰に据えている。或いは、小振りでひ弱に見えながら、僅かに小指を動かすだけで視界に入るものを滅するほどの危険なものを懷に潜ませている。

彼らは一様に、椅子や壁に寄りかかり、低く唸るような声で会話をしていた。

ぎしり、と。

その鈍い音は、外とは隔絶した空間に風が舞い込む合図だった。

重い扉がゆっくりと開かれ、室内の目が一斉に向けられる。

薄暗い室内に、太陽の光が差込み、目を細めたものはいかほどいたのだろうか。

ぎりり、と。

重く厚い扉が再度閉じられたとき、室内にあったのは白光だった。

長く伸ばされた白金の一房が、ふわりと広がった。

本来は金髪なのだろうが、その一本一本があまりに細いため、銀に近い色合いを放っている。腰ほどにまで伸びたそれは緩く束ねられていた。

やたら、裾の長い淡白色のジャケットにはアクセサリーのつもりなのか、長く細い鎖が何重にも絡み合っている。複数あるポケットの内側からも伸びたそれは、着る者を拘束しているような印象を与えた。

足を覆うパンツにもまた色とりどりの鎖が張り付き、足元を覆う無骨なブーツへと繋がっている。

唯一、鎖が繋がっていないのは、腰から垂らしている黒と金に縁取られた赤い布だけだった。

それらを身にまとうのは、まだ子供の域を出ていないような少女だった。

じゃらじゃらと金属が擦れ合う音に反して、軽快な足取りでカウンターを目指す。

向けられる視線など、端から存在していないかのようにだった。

「すいません」

伸びをしてカウンターの中を窺った。

カウンターの奥には一人の老人が座っていた。枯れ果てた細い指が分厚い本のページを捲り、老眼鏡の向こう側から、子供を窺う。

「お仕事を探しているんですが」

無愛想な老人に、柔らかな笑みを浮かべる。

その場の淀んだ空気も、濁った緊張感も一切、頓着せず、不釣り合いな笑顔がその顔を飾る。

「どんな仕事をお探しかね」

老人は、空気にも笑顔にも惑わされる事なく、淡々と己の業務を果たす。閉ざした本をカウンターの上に放り出し、色あせたファイルに手を伸ばす。

「滅亡ノ末退治の依頼はありますか？」

「滅亡ノ末退治だあ？」

答えたのは老人ではなく、壁に寄りかかって闖入者を窺っていた男。

全身を鈍色の ^{メタルビート} 鋼虫甲 の鎧で包み、腰の左右に ^{ジューンボーン} 真獣骨 で作られた剣を下げている。黒く日に焼けた顔には大きな傷が亀裂のように走っていた。

「子供に倒せるような滅亡ノ末がいるとは知らなかったな」

男の言葉に合わせるように、嘲笑が広がる。

だが、子供はそんな言葉など聞こえていないかのように黙って老人を待つ。

老人もまた、室内に広がった笑いに同意することも反論することもなく、ファイルを捲り続ける。

あるページで手を止めた老人は、眼鏡越しに子供を写した。

「協会 認証 は？」

「あるよ」

鎖に紛れていた銀色に輝くタグを首から外し、子供はカウンターに置く。老人は眼鏡を外し、それを確認する。

「おいおい、最近の ^{ギルド} 協会 はこんな子供にも ^{タグ} 認証 を出すのか？」

いくら、人が足りないからといってそれはないぜ、と続いた言葉に合わせるように、僅かに老人の眉が潜められた。

それは、男の言葉に賛同したからではなく、^{タグ} 認証 の文字を認識したからに他ならない。^{タグ} 認証 と目の前の ^{アリス} 子供 を見比べ、納得したように老人は息を吐いた。

「^{ホワイトベリッシュ} 雪白の災厄 か。……随分と大物が流れてきたようだね」

「雪白の災厄だって！」

その単語を拾った男が、悲鳴に似た叫びを上げた。淀んでいた空気が一瞬に変貌する。

「この子供が、^{アリス} 雪白の災厄 だって？ まさか、あの ^{ホワイ} 道士 がこんな ^{アリス} 子供 なわけ」

男は子供に近付く、子供はようやく、自分と老人以外に人がいたことに気がついたように、顔を上げた。

元来、色素が薄いのだろう。雪のように白い肌に反するように頬が赤く染まっている。瞳も本来は金色なのだろうが、霞んで銀に近い色合いを浮かべていた。

「^{アリス} 子供 じゃないよ」

拗ねたように口元を窄ませて言った。

「ヒュー・ハイアットだよ」

そこで、ようやく、男は目の前の ^{アリス} 少女 がではなく ^{クリス} 少年 であることに気付いた。

それだけではない。少年が身につけている衣服には虹色の光沢があった。^{イリンローズ} 翼の猛き花 が紡いだ糸によって、^{ミシルブラッド} 滅ばしの森の民 が織った対 ^{ドラゴン} 滅亡の末 用の特殊繊維服だった。

「この子供が、本当に^{ホワイトベリッシュ}雪^{クリス}白の災厄なら、こいつをぶちのめせば俺の名があがるてわけか」

男が笑えば、顔の傷が歪んだ。

呼応するように、室内にいた複数の人影が殺気立つ。老人は目を細めた。

「騒ぎなら外でやってくれ」

部屋の中で暴れられるのはごめんだと呟く。

状況が飲み込めていないのか、^{クリス}子供は小首を傾げた。

各々の武器を手にし、^{クリス}子供を取り囲む輪ができる。

^{クリス}子供に対し、複数で向かい合うことに恥を覚えることはない。^{クリス}子供だろうが、^{レイン}道士ならば立場は大人と変わらない。

^{レイン}道士は有名であればあるほど、より稼げる仕事が^{ギルド}協会から回される。

逆に名を上げなければ、ろくな仕事が与えられない。

名を上げるために、^{レイン}道士同士が争うことは、珍しいことではなかった。

だが――。

「何をしている」

平坦な、抑揚のない声が響いた。

誰も、予期していなかった音だった。

^{クリス}子供を取り囲む^{ヨハネ}大人たちも、^{ギルド}協会によって依頼の管理をしている老人にも、あまりにも予想外な音の登場だった。

唯一、驚かなかったのは、^{クリス}子供だけだった。

「兄さん」

親しみが声に宿った。

いつの間に室内に入ってきたのか誰にもわからなかった。

あの重い扉が音も立てずに開いたとも考えられず、かといって最初から室内にいたとも思えず、虚空に唐突に姿を現したかのように、そこにいた。

黒だった。真っ黒、漆黒、そんな言葉で表せない。

言うならば、闇。全てを飲み込む黒がそこに存在した。

頭先从足元まで、その全てを黒い布で覆い隠し、僅かに覗く顔されも、フードで隠され、口元が窺えるだけで、表情を読むことさえ適わない。

つい、と足元が動き、それは弟に近付く。

黒に僅かに光が宿ったように見えたのは、その布もまた、^{ドラゴン}対滅亡の末用に作られたものだからだろう。

「仕事を請けるだけなのに、随分と時間が掛かっているな」

「ごめんなさい、兄さん」

叱られた子犬のように頭を垂らす。

弟を囲む輪を平然と乗り越えて、闇はその傍らへとやってきた。

布の内側から伸びたのは黒い棒――ではなく、腕だった。

僅かに金属の光沢を持つ漆黒の腕が^{ギルド}握むのは^{タグ}協会認証。それを老人に見せる。

ドラゴン
「滅亡ノ末退治の依頼はあるか？」
ギルド タグ
協会 認証に描かれる文字を認め、老人は首を左右に振った。
ダークイーター
「常闇の暴食……まさか、こんな辺境に^{ハイアット}末路兄弟が来るとは」
ファイルから依頼書を出すと、それを差し出す。
「これでどうかね。もつとも、あんたら兄弟にしてみれば容易い仕事かもしれないが」
「……もらおう」
ダークイーター
内容を確認すると 常闇の暴食 は、依頼書を仕舞いこむ。
ギルド タグ
カウンターの上に置き去りになっていた、弟の 協会 認証 を手に取ると、それを弟の首にかけてやった。
「ありがとう、兄さん」
弟の笑みを見流して、兄は扉へと足を向ける。
「待ちやがれ」
無視される形となった男が屈辱に唇を震わせて立ちふさがった。
ホワイペリッシュ
「^{ダークイーター}雪白の災厄 だろうが、常闇の暴食 だろが関係ねえ、まとめてぶちのめしてやる」
だが、男に続く声はなかった。
片や年端もいかぬ子供。片や正体の知れぬ大人。
しかしだ。彼らは愚かではない。目の前にいる相手の力量さえ、わからぬようではこの世界では生きて行けない。
子供はともあれ、誰一人としてその存在を知られぬように姿を現した男は、本物の ^{ダークネス} 常闇 だった。
対峙する男とて分からぬはずはないが、息巻いて子供に詰め寄った手前、引き際を逃がしてしまったのだろう。
常闇が顔を上げた。
「……っ」
フードの隙間から覗いた目。縦に伸びた緋色の瞳孔が男を射抜いた。
人間の目にありえないその光が、男の本質を歪めた。
男は呼吸を忘れた。息を吸う吐くという単純でありながら、必然の行為さえ忘れた。
酸素を取り込むことができず、男はくぐもった呻きを漏らし、膝をついた。
常闇は、そのまま男の脇をすり抜ける。
「兄さん、待ってよ」
重い扉を開いて出て行く兄弟を止めることができるものなどいなかった。

金属が擦れる甲高い音と、鈍い音が混じりあい、まるで音楽を奏でているかのようなようだった。

草木が生えぬ岩肌を登るのは、^{ホワイトペリッシュ}雪^{ホワイトペリッシュ}白の災厄の謂れを持つ、ヒュー・ハイアットだった。

ヒューは手足を伸ばして、岩にしがみ付くようにして先へと進む。

その視線の向こうにあるのは兄の姿だ。

^{ダークイーター}常闇の暴食と称される、ウィッジ・ハイアットは背後を振り返ることなく、黙々と岩を越えていく。どんなに巨大な岩でさえ、足を止める理由にはならない。

弟が四苦八苦する道のりは、兄にとって障害にはならないのだろう。瞬く間にその姿は灰色の向こうに消えてしまった。

ヒューは慌てることなく、自分のペースで登っていく。

足場は悪く、一步踏み違えば、真っ逆さまに落下する。岩場は固く、掴めるところはないに等しい。

「ふわぁ」

大きな岩を越えたところで、ヒューは振り返った。厚い雲が覆う空の下、灰色の大地がどこまでも続いている。同様な大地は世界各地にある。

二百年ほど前に、^{ドラゴン}滅亡の末の数が増した。

その理由は未だにわかってはいないが、縄張りや食料を巡って^{ドラゴン}滅亡の末同士が争い、緑の大地は焦土に変わった。多くの人間たちが争いに巻き込まれ、命を落とした。

あの頃に比べて、幾分か数を減らしたとは言え、長命である^{ドラゴン}滅亡の末は依然として多く存在している。

人間は、害を及ぼす^{ドラゴン}滅亡の末に立ち向かい、その生を守ってきた。

そういった中で、^{ドラゴン}滅亡の末に限らず、人間の犯罪者や^{デビル}魔物など、人間社会に害をなすものを排除する機関——^{ギルド}協会が生み出したのは自然な流れだったのだろう。

その^{ギルド}協会に属し、仕事を請け負うものこそが、^{レイン}道士だ。

止めていた足を動かし、一步一步確実に上がっていく。

やがて、唐突に視界が開けた。登る岩はどこにもなく、重い雲だけが広がっていく。

強風が襲い掛かり、ヒューは身体をよろめかせる。身につけている鎖が激しくぶつかり鳴り合うが、風に流され音は耳に届かなかった。

ゆっくりと頭を動かせば、岩の上に立つ黒い影を見つける。

強い風が吹きつけているというのに、その影は揺らぐことなく、一点を眺めている。

ヒューは兄が立つ岩の下までやってくると、その視線の先を探す。

「……書いてあったより大きいね」

荒れ狂う風を避けるためにあるかのように、ぽっかりと地面に開いた穴。その中央に巨体を埋めていたのは、毒々しいまでの赤を抱く^{ドラゴン}滅亡の末。

体長は、先ほど依頼を請け負ったギルドの建物ほどか。

長い胴で弧を描き、尾を丸めて、その内側に頭を隠している。

血で塗りとくったように赤い鱗が、きらきらと光を反射し揺らめき、金に輝く棘のようなものが突き出しているのが見えた。

頭は見えないが、血肉を食いちぎるための鋭い牙と、映すものをけして逃がさない眼光が宿る眼がそこにあるに違いない。

「……ヒュー」

ウィッジは弟に視線を移した。フードの奥に潜んだ双眸がヒューに寄せられる。

「任せて」

その意志を汲み取った弟は、風に流されないように両足を踏ん張ると赤い布に隠された腰の後ろに手を回した。

じゅらじゅらと鎖を纏わりつかせながら取り出したのは、白い剣のようなもの。

もっとも、普通の剣とは違い、刀身の部分が丸く太く、何重にも鎖が巻かれている。鎖の先は柄の中に収納されており、ヒューの身に纏わりつく鎖に繋がっていた。

ヒューは柄の部分握り、その感触を確かめると、

「じゃあ、兄さん。いつも通りに行くよ」

「ああ」

返る声を合図に、ヒューは躊躇うことなく穴の中へと飛び込んだ。

——浮遊感。

内臓が浮き上がり、未消化だったものが胃から食道へと上がる感覚。

それさえも、高揚へと変えて、ヒューは柄を大きく振り回した。

遠心力——円心力。

刀身から鎖の輪が広がる。鎖の先には鋭い刃がついており、それが穴の壁に突き刺さった。

まるで網のように、滅亡^{ドラゴン}の末の上に鎖が降り注ぐ。

異変に気がついた滅亡^{ドラゴン}の末が顔を上げた。

鼻に近付くほど細やかになる頭の左右につけられた赤い珠。

それがぎよろぎよろと蠢き、鎖によって宙吊りにされたヒューを見つける。

長く太い首が伸ばされ、入った亀裂から等間隔に並んだ牙が覗いた。

大きな翼が威嚇の意志を持って広げられるが——。

「はい」

ヒューは、ポケットから取り出した小さなカプセルを柄に開いた穴に埋め込んだ。

「そーれ」

軽い動作で柄を回す。

刀身から光が放たれた。黄色か、白か、あるいは金か。光は目にも止まらぬ速さで鎖の上を走り、その先が触れてい^{ドラゴン}る滅亡の末の翼に到達した。

叫び声が響き渡った。

人など軽く飲み込めるであろう口蓋を大きく開き、漏れ出した舌を伝って体液が吐き出される。

翼の端が黒く変色し、滅亡^{ドラゴン}の末はその巨体を震わした。

ホワイトトール^{ドラゴン}。「雪白雪舞^{ドラゴン}。ちょっと威力が弱かつ……わあ」

全身を駆け抜けた電気に、滅亡^{ドラゴン}の末が翼を暴れさせる。何本かの鎖が千切れ、ヒューは空中でバランスを崩した。

その真横を高速で落下する影。

ウィッジが、滅亡^{ドラゴン}の末を目指して急降下する。

その手に握られているのは、小振りのナイフ。

それが燃えるような赤い鱗に――鉄よりも鋼よりも硬いはずの鱗に突き刺さった。

一体、どこに収納されていたのか、次々とナイフがその手に生まれては矢継ぎ早に放たれる。

ナイフにはヒューへと続く鎖が繋がっていた。

「ヒュー」

風に乗って届いた兄の声に、柄を回転させて、新たなカプセルを埋め込む。

ホワイトトール セカンドショック
「雪白雷舞、第二弾」

光が鎖を通じて放たれる。キラキラとドラゴンに向かって走るそれは、さながら、振り落ちる雪のようで。

ドラゴン
滅亡の末の上に降り立ち、翼の付け根――鱗で守られていない柔らかな皮の部分に、ウィッジは手にした黒い太刀の先を差し入れていた。どろりとした体液が流れ出し、足元を濡らす。

背に乗るものを振り払おうと翼を動かし暴れるが、ウィッジはよろめきもせずに、淡々と同じ箇所を攻撃を仕掛け続ける。

セカンドショック
第二弾 が放たれ、光がドラゴン
滅亡の末に到達する寸前にウィッジは、虚空に跳躍した。

悲鳴のような叫びがあがる。

ナイフを伝い、鱗の内側に達した雷は、ドラゴン
滅亡の末の内臓を焼いた。

身の内側を焦がす苦痛に暴れるドラゴン
滅亡の末の動きに、鎖が断ち切れ、ヒューの体が投げ出される。

すかさず、ウィッジが弟の身体を捕え、穴の外へと駆け上がった。人ひとりを抱えているとは思えない身軽さだ。

その後を追うように、巨大な翼を広げ、ドラゴン
滅亡の末も飛び上がった。

だが、痺れが残っているのだろう。高く舞い上がることができず、その巨体を穴の壁に何度もぶつける。

這い出るように穴から飛び出したドラゴン
滅亡の末を待ちかねたように、ウィッジは鼻先に太刀を振るった。

ドラゴン
滅亡の末の圧倒的防御力を可能にしているのが、その全身に張り付く硬い鱗だ。しかし、鱗一枚一枚の僅かな隙間や、翼の付け根など、全てが完璧に守られているわけではない。

ハイアット
強固な守りの、防ぎようのない小さな弱点。それを突くのが末路兄弟のやり口だった。

「わぁ」

小さな悲鳴が上がった。

ウィッジがドラゴン
滅亡の末を切りつけた際に飛び散った体液の一滴が、ヒューの服についたのだ。それは、ヒューの服に小さな穴を開けた。

咆哮が天を切り裂く。

ドラゴン
滅亡の末の四肢から瘴気が立ち上る。

目の前にいる小さな生き物が、己を狩るものだと、ようやく認識したドラゴン
滅亡の末の眼の色が変わる。

眠れる獣が目を覚ます。

――だが、それはあまりにも遅すぎた。

ハイアット
末路兄弟を退けるのならば、ドラゴン
滅亡の末はもっと早くに行動を起こすべきだったのだ。

ヒューは新たなカプセルを柄に仕込むと、刀身を振るのと同時に、身体を大きく捻らせた。

鎖が滅亡の末に降りかかる。

己を拘束する金属を引き千切るように、滅亡の末は身体を揺らした。

たいした抵抗もできず――抵抗することもせず、高々と軽いヒューの体は天に舞い上がる。その口元に浮かぶのは
笑み。

「^{ホワイトフレイム}雪白燐炎」

柄を回転させる。

白い炎が刀身から生まれ、鎖を走る。打ち付けるような強風にも消えることなく、それは滅亡の末の元まで届く。
じゅ、と。

鱗に白炎が触れた瞬間、酸にさえ溶けることのないはずの鱗が鼻につく異臭と共に溶解する。

強い風が吹きつけ、吐き気をもよおすような悪臭の中、ウィッジがドロドロに溶けた鱗に太刀を叩きつける。

まるでチーズを裂くように、ぼろぼろと鱗が剥がれ落ちた。

――叫び。

まさに、叫びとしか言い様のない音が、滅亡の末の暗い牙の隙間から漏れだす。

頭を、腕を、足を、翼を、苦痛から逃れようとするように振る。

落下してきたヒューを受け止めると、ウィッジは距離を取った。

白炎が消えた後、滅亡の末の体表は見るも無残な有様と化していた。

血色の鱗の大半は剥がれ、赤い液体を噴出し、或いは灰色に変色してこびりついている。

口から垂れ流される涎には血が交じり、その細やかでありながら逞しい首を汚していた。支えるべき付け根を切られた翼は大きく傾いている。

風が匂いを吹き消し、ウィッジのフードを退かせた。

黒というよりも、紫に近い髪が露わになり、整えられた前髪を横へと流す。

作り物のように、あるべき場所に描かれた柳眉は潜められ、閉じられた口元には悲しみも、喜びも、怒りも、哀も宿
っていない。

一瞬たりとも逸らすことなく、滅亡の末を射抜く瞳は、緋色。

縦に割れた瞳孔が日の光を浴びて収縮した。

「貴様」

吐いた音は地響きとなり、兄弟を襲う。

ぎょろり、と回転した淀んだ眼が、^{ハイアット}末路兄弟を映した。

正確に言うならば、恐れも怯えも、動揺すら浮かべない兄の方を。

「貴様、なぜ人間の味方などする」

兄の背に隠れて、風をやりすごしながら、新たなカプセルを柄に仕込んでいた弟はその言葉に、顔を上げた。

睨みあう、兄と滅亡の末。

「兄さ……」

「なぜ、愚かな種族の姿など取っている」

ウィτζが眉を潜めた。

それは彼が初めて見せた感情らしいものだった。

「意味が分からんな」

太刀を鞘に収め、後ろ手で弟を促せば、心得たものでヒューは兄の背から距離を取った。

「姿形変われど、同属の目は誤魔化せん。貴様は……」

^{ドラゴン}
「滅亡の末などと、話をする気はない」

ぐにやり、とウィτζの姿が歪んだ。

輪郭が滲み、身に纏っていたローブが風に舞う。それをヒューが鎖を使って回収する。

^{ドラゴン}
低く奏でられた呻きは、滅亡の末のものか、あるいはウィτζのものか。

ヒトガタが膨張し、数十倍に膨れ上がる。骨が軋み、肉が弾ける。肌が硬化し、鋭く尖った角が皮を突き破って生まれる。

やがて、姿を現したものは――。

紫の光が、眩いばかりに四方に反射した。滑らかな光沢を見せる鱗と。胴を形作る美しい曲線。

透けるほどに薄い翼膜が鼓動を刻むように震えた。

緋色の虹彩が細まり、縦に刻まれた瞳孔が広がる。

^{ドラゴン}
「やはり、貴様は 滅亡の末 の――」

続く言葉は消えた。

^{ドラゴン}
何が起こったのか、滅亡の末は理解できたのだろうか。

^{ドラゴン}
硬いものが砕け散る音が響き渡った。鋭い牙が、赤い 滅亡の末の胴に突き刺さった。

^{ドラゴン}
黒紫の滅亡の末が喰らいついた箇所から、黒いシミが広がり、すでに溶解し傷だらけだった赤い ^{ドラゴン} 滅亡の末の鱗を染め上げる。変色した肉が、土で作られていたかのように、乾いて崩れ落ちた。

断末魔の叫びもなかった。叫ぶなどという行為すらできなかった。

^{ドラゴン}
なぜならば、黒紫の滅亡の末が噛み付いた時点で、その言葉が途切れた時点で、赤い ^{ドラゴン} 滅亡の末はその強靱な命を散らしていた。

^{ドラゴン}
真っ赤に染まった口が、死に絶えた滅亡の末の胴から離れる。ぼろぼろと崩れるようにその巨体が失せていく。

あっという間の幕引きだった。

^{ドラゴン}
残った灰を風が引き取り、あとには黒紫の 滅亡の末 だけが残っていた。

同属を殺めた罪悪感も、強敵を倒した感慨もなく、光が透ける翼を広げ、毅然と存在していた。

^{ドラゴン}
もっとも、それも一瞬、 滅亡の末 の姿は変異したときと同様に歪み、ヒトガタへと戻る。

「兄さん」

兄の変貌を当然のごとくとして受け取って、駆け寄ってきたヒューからローブを受け取り、羽織る。

^{ドラゴン} ^{イーター} ^{ベリッシュ}
滅亡の末を一匹、喰らって見せた 暴食 を 災厄 は己の武器を腰の後ろに納めながら、見上げる。

「思った以上に簡単だったね」

「ああ」

^{ドラゴン}
「それにしても、変なことをいう 滅亡の末 だったね」

小首を傾げて、考え込むように腕を組む。

鎖が触れ合って甲高い音を響かせた。

「兄さんのことを滅亡^{ドラゴン}の末だって。兄さんは、滅亡^{ドラゴン}の末に变身できるだけで滅亡^{ドラゴン}の末じゃないのに」

自分の仲間と、滅亡^{ドラゴン}の末に变身できる道士^{レイン}の区別もつかないのだろうか、としきりに首を捻る。

フードで顔を隠し、元の黒い影に戻った兄は、眉間に皺を寄せる弟の頭を片手で撫でた。ふわふわと散る髪はまるで雪のようで。

「滅亡^{ドラゴン}の末の考えることなど、わかるはずがない」

「そうだね。——でも、もし」

僅かに、間があった。

「もし、兄さんが滅亡^{ドラゴン}の末だったら、ボクは兄さんを殺すよ」

悲しげに、だけれど仕方ないと言わんばかりに頷く。

それに対して、兄は——。

「もし俺が滅亡^{ドラゴン}の末だったら、弟であるお前も滅亡^{ドラゴン}の末だろう」

抑揚のない声音で返した。

「そっか、そうだね」

納得したような安心したような笑顔を浮かべる。

「僕が滅亡^{ドラゴン}の末じゃないんだから、兄さんが滅亡^{ドラゴン}の末のはずがないよね。」

心底、嬉しそうに微笑む弟の姿に、フードの奥でウィツジは目を閉じた。

「くだらないことは考える必要はない。俺はあんな野蛮な滅亡^{ドラゴン}の末じゃない。一緒にされるのは御免だ」

「うん、兄さん、ごめんなさい」

頭を垂らす弟に、兄は再度その髪を撫でた。

「もうここには用はない」

下らない話は終わりだと、踵を返すウィツジの後をヒューは慌てて追う。

一瞬——。

弟に気付かれないように、一瞬だけ、ウィツジは背後を振り返った。

そこには先ほどまであった、赤い滅亡^{ドラゴン}の末の姿はないけれど。

「悪いが、俺は滅亡^{ドラゴン}の末であることをやめたんだ」

「……兄さん、何か言った？」

なんでもない、と答えて兄は岩だらけの道なき道を下っていく。弟はその後を追いかける。

灰色の空はどこまでも高く、どこまでも遠く続いていた。

それは、まだ。
兄弟が旅立つ前、
弟が生まれる前、
兄弟が兄弟となる前、

それは、末路から末路が始まる前の。

物語。

2011/10某日 電子版書き下ろし

轟音を奏でて倒れ込む巨体。赤黒い砂埃が立ち上り、視界を遮った。鉄錆色に濁った天上から緋紺色(グリムレッド)の雨が降り注ぎ、大地を汚していく。

分厚い雲の向こうで雷が光り、低く脅すように存在を轟かせていた。

大きくえぐられた大地の亀裂に、怒りを秘めた悲鳴のような音を立てて、水が満ちていく。

周囲には何もなかった。染められつつある黒い大地に、崩れた岩肌、業火によって炭と化した木々。

生き物の気配もなく、ただ黒く、緋色に壊れた世界が広がっていた。

わずか、数刻前までここが緑豊かな大地であったとは、誰が信じるだろうか。ほんの少し前まで、多くの生き物が息継ぐ森であったとは、誰が思うだろうか。

大地は焦土と化していた。わずかな間に、その世界は大きく変貌した。

その罪を贖うかのように、世界を壊した主は、緋紺の雨に打たれ、冷たい軀になり果てていた。

鈍い黒紫の鱗が空を走る雷鳴に合わせて、ざらりと光った。鋭い何かで突かれたのか、その身を守る強固なはずの鱗には無数の穴が穿れていた。

穴からは炎を纏った金色の血が流れ出ている。それは地面に伝い落ち、燃えるはずのない大地を燃やしていた。

透けるほどに薄い翼膜は溶解したのか、裂かれたのか、もはや原型を留めていない。細い骨にまとわりつく微かな膜の断片が雨に打たれ、小さく震えるだけだ。

滅亡ノ末(ドラゴン)と呼ばれる存在は、大地を、空を、世界を支配する種族は、屍となり果ても、なお美しく金の炎を纏って、他者を圧倒させる存在感を持って、場の支配者として存在していた。

思考を止め、鼓動を止め、生存を止め、ただのモノと果てた巨体は、灰色に濁った眼差しを、自らを打ち破った断罪者(カルマ)に向けていた。

「厄介な敵だった」

呟きは雨に食われた。口から漏れた息には血が混じり、失った腕は今更に痛みを訴えだした。つぶれた片目からは赤い涙がこぼれ落ち、傷ついた足は大地と一体化したかのように動かない。

終幕なき道化(クラウンクラウン)が離宮の獣(コードビースト)の毛皮で作った対滅亡ノ末(ドラゴン)の上着は金の炎に焼かれ、その大半を失っていた。奈落の樹(エンドレスウッド)の手甲は碎かれ、中に収まっていた腕ごと持っていかれた。

淡い光を放つ鎮氷の剣(ガーディアルス)は真っ二つに折れ、先の刃の部分は溶かされたのか、視線をどこに向けても欠片すら見あたらない。

雨の中、全身に傷を負い、それでも両足で大地を踏みしめていた男性は、ようやく討ち滅ぼした相手に感嘆の眼差しを向けていた。

「この界屠の王刃(ネクログレブレド)をここまで追いつめたこと……汝、我が生涯において最も強敵であったことを私は認めよう」

男は微笑んだ。失ったものは多かったが、そんなことがどうでも良くなるくらいの喜びを感じていた。

「エトワーっ！」

声が響いた。ゆっくりと視線を向ければ、緋紺色(グリムレッド)の雨で霞む視界の中、走り寄ってくる女性の姿が見えた。

「無事だったのね」

「この姿を見て無事というのは君くらいのものだろうな」

男――エトワー・ハイアットは苦笑を返した。

走り寄ってきた女も無傷ではなかった。衣服は所々が割け、露わになった肌が赤く滲んでいる。炎にあぶられたのか、髪は焦げ付いていた。

それでも、男よりも傷が少ないのは、彼女が後方支援を担当していたからだ。

女は首から下げていた小瓶の蓋を開いた。傾けたわけでもないのに、瓶口から銀の液体が溢れだし瞬く間に、女の手を染めあげる。

女は銀に塗れた手を男の傷口に当てた。

しばらく、傷口を撫でていたが、女はやがて指先を離す。最初から傷など負っていなかったかのように、そこには痛みの痕跡はなかった。

虚構の妖精(メシアフェアリ)の燐粉から作られた薬は、どんな傷でも瞬時に癒すことが可能だった。だが、その薬を作れるのは、この広い世界においても僅かな者だけ。

その僅かな数に入る女――星陵の治手(ノールハンド)と呼ばれるリア・ハイアットは、次々と男の身体を癒していったが、散切れた腕と、潰れた眼を見て小さく首を振った。

「これは、だめね。治せないわ」

「構わないさ」

これからは、一つくらい腕と目がなくても、問題はないと、エトワーは快活に笑って見せた。

末路夫妻(ハイアット)は、協会(ギルド)に属する道士(レイン)であり、滅亡ノ末(ドラゴン)退治の専門家だった。町を、人を襲う滅亡ノ末(ドラゴン)を退治するためだけに、生きてきた。

だが、人の時間の流れは速い。滅亡ノ末(ドラゴン)を倒すためには、常に「強く」なければならない。末路夫妻(ハイアット)は、年々その限界が近づいていることを感じ取っていた。

そして、今回引き受けた滅亡ノ末(ドラゴン)退治を最後に、引退を決めていた。

「最後に良い戦いだった。今までにない最高の――」

視線の先には果てた滅亡ノ末(ドラゴン)。金の炎はいつの間にか消えていた。

長い戦いは終わり、もう二度とこの高揚感を覚えることがないことを残念に思いながら、エトワーは大きく息を吐き出した。

「ちょっと、待って」

最初にそれに気がついたのは、リアだった。

注意深く周囲を見渡す。腰から吊していた白蛇の屍杖(ホワイトヘッドラム)を掴み、構える。エトワーも半分に折れた鎮氷の剣(ガーディアルス)を片手で握りしめる。

緋紺色(グリムレッド)に染まる岩が揺れた。リアは杖を大きく振るった。杖の先から細い紐が飛び出し、岩にぶつかる。

「銀星の屍雷(シルバエルロール)、第一弾(ファーストショック)！」

銀の光が散った。細い紐を閃光が伝い、岩の上で弾けた。人間の背ほどある岩が爆音を立てて砕け散る。飛び散った破片が、足下まで転がってきた。

土煙はすぐに雨に流された。そこにいたのは――。

末路夫妻(ハイアット)は顔を見合わせた。

小さな紫の翼が震えた。黒い鱗は滑らかで、雨に濡れててらてらと光っている。緋色の眼差しには怯えが浮かび、今の爆発で足を痛めたのか、よろめきながらも距離を取ろうとする。

そこにいたのは、まだ小さな、幼い滅亡ノ末(ドラゴン)の子供だった。おそらくは、今さっき倒した滅亡ノ末(ドラゴン)の子供だろう。あれほどの戦いによく巻き込まれなかったものだ。

そこまで考えて、エトワーはようやく合点がいった。追い詰められていたはずの滅亡ノ末(ドラゴン)が逃げようともせず、頑なにこの場にとどまったのは、子供がいたからか。子供を置いて逃げるのができず、ここで末路夫妻(ハイアット)に敗れることになった。

子を想う気持ちは滅亡ノ末(ドラゴン)も人間も同じなのかもしれない。エトワーは倒した滅亡ノ末(ドラゴン)に一抹の親近感を覚えた。だが、だからといって、子供を見逃すわけにはいかなかった。

滅亡ノ末(ドラゴン)は成長すれば、人間を獲物として襲う。子供だろうが、滅亡ノ末(ドラゴン)であれば、問答無用で抹殺することを協会は命じている。ならば、末路夫妻(ハイアット)もそうすべきだった。

「……生後三日ほどか」

滅亡ノ末(ドラゴン)の子供は小さかった。親があれほどの巨体だというのに、その子供は一抱えほどしかない。翼は弱弱しく、足元もおぼつかない。

「すまないが、君を生かしておくわけにはいかないんだ」

親が殺される場面を見ていたのだ。今は人間に怯えていても、いずれ、成長すれば、復讐するために牙を剥くだろう。今、ここで殺さなければならない。

エトワーは子供に近づいていく。

「君の親は殺さねばならなかった。人間を襲った滅亡ノ末(ドラゴン)を見逃すことができない。だが、君はまだ何もしていない。何もしていないが、殺さなければならない」

小さな滅亡ノ末(ドラゴン)は、首を傾げた。言葉の意味を理解しているのかどうかはわからない。滅亡ノ末(ドラゴン)は人間の言葉を理解するが、この子はまだ幼すぎた。

それでも、エトワーは話しかける。それが殺す側の義務だと信じて。

剣を大きく振り被る。その幼い命を絶つために。

「すまない」

吐き出した謝罪は痛みを伴った。振り降ろした刃は無抵抗な小さな生き物へと向かう。が、
「謝らないで」

その小さな首を落とそうとした刃が止まった。エトワーとリアは目を見開いた。

「強きモノが生き残るそれが定めだから、謝らないで」

言葉を発した目の前の小さな滅亡ノ末(ドラゴン)は、縦に割れた緋色の瞳でエトワーを見上げた

。

「おかあさんは、弱いから負けた。僕は弱いから殺される」

だから、謝らないで。

生まれて間もないと言うのに、彼はこの世界の規則をすでに理解していたのだろう。

「君は……」

「おかあさんのこと褒めてくれてありがとう。優しい言葉をくれて、ありがとう」

きらきら、と輝く瞳に感謝の色が浮かんで、エトワールは息を飲んだ。

今まで、滅亡ノ末(ドラゴン)は敵だった。言葉を交わすことがなかったわけではない。しかし、敵は敵だった。感謝されたことなど、一度としてなかった。

「さあ、殺して。僕を殺して」

幼い命は、エトワールに懇願する。

エトワールは暫し考えたあと、手にしていた剣を再度振りあげた。

滅亡ノ末(ドラゴン)退治を引退した末路夫妻(ハイアット)は、集落から少し離れた岩山に小屋を建て暮らし始めた。レンガを積み重ねて作られた家屋は、この地方の厳しい寒さと、岩山特有の強い風に耐えうるよう、強固な灰色の壁に囲まれた造りになっていた。

けして、広いとは言えず、それまで積み上げてきた功績に対して、妥当とは言えない質素な家ではあったが、一カ所に留まって生活することのなかった夫婦にとって、ようやく得ることができた終の棲家であった。

台所に立つリアは、鍋の中をゆっくりとかき混ぜる。それまで、料理と呼べるようなものをほとんどして来なかったリアだったが、薬草を作るのと大して変わらないと豪語して、実際、僅かな間で、一般的な料理は全てマスターしていた。

清潔感のある白いエプロンを身に纏ったリアは、鍋の中を覗き込む。

たちのぼった湯気が視界を一瞬覆い、食欲をそそる匂いが鼻先をかすめる。最近は、朝夕の寒さが厳しい。外に出ている夫のために、温かなものをと、リアは忙しく台所の中を動き回っていた。

。

がたがたと玄関の方で音がした。風が戸を揺らしているのかと思ったが、見知った気配に、リアは火を止め、台所を離れた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

リアはエトワールを迎えに出る。

何日も荒れ果てた大地を放浪していたころと違い、エトワールの身なりは小奇麗なものになっていた。町に入ることがなければ、伸ばし放しになっていた髭は綺麗に剃られている。その身を覆っていた対滅亡ノ末(ドラゴン)の装備は倉庫の奥に大事に仕舞いこまれ、常に周囲を警戒していたため、陰しかった眼差しは幾分か柔和なものに変わっていた。

しかしながら、その身が歩んできた過酷な生き様の証は確かに残っている。失った片目に走る、引き攣った大きな傷と、二度と戻ることのない失われた腕は、夫妻にとって誇りだった。

エトワールは一つとなった目で最愛の妻の姿を映した。

「今日は大量だぞ」

エトワールが片腕で器用に抱えていたのは、大きな猪だった。泥まみれのその巨体は、すでに息絶えているのか身動きしない。猪には外傷は見当たらず、僅かに開いた口から赤い染みが広がっていた。

エトワールは玄関の傍らの大地に獲物を下ろした。引退したとはいえ、その体力に衰えが見えないのは、未だ欠かさず鍛錬を重ねているからだ。

「すごいわね」

「魚もあるぞ。ウィッジは魚を捕るのが上手くてな」

振り返った視線の先、両手に大量の魚を抱えた少年が立っていた。

たった二本の腕では、到底持ちきれないであろう数の魚を軽々と抱え込み、その重さによろめくことも、凍った水から上がったばかりの魚の冷たさに表情を歪めることなく、エトワールの背後に付き添っている。

触れずともわかる、しなやかで艶やかな黒紫の長い髪が風に巻き込まれ、先を揺らめかす。整った柳眉に、通った鼻筋、肌は真珠のように滑らかで透けるほどに白く、精巧な作りモノのような相貌が、表情らしい表情を描くことは、ほとんどない。

だが、けして作り物でないことを証明するかのように、緋色の瞳には困惑の色が浮かんでいた。

エトワールは、立ち尽くす少年から魚を受け取ると、井戸の方へと持っていく。日が暮れる前に、内臓を取り出しておかなければならない。

リアは少年に近づくと、

「すごいわね。ウィッジ。貴方のおかげで当分魚には困らないわ」

何を作ろうかしらと呟きながら、リアは少年の頭を抱きしめるように撫でた。リアの手がその髪に、肌に触れても、少年は嫌がる素振りを見せることも、褒められたことを喜ぶ素振りも見せなかった。ただ、小さく首を傾げて、

「.....魚が獲れたくらいで」

「あら？ そんなことを言ったらエトワールに怒られてしまうわよ」

だって、彼は魚を捕るのが下手なんですもの。

楽しげに笑うリアに、ウィッジも――表情らしい表情がなかったその美しい顔に――つられて笑みを浮かべた。

「さあ、ご飯の支度をするから手伝ってちょうだい」

家の中に入っていくリアに、ウィッジは当然のように続いた。

殺してくれと言った小さな滅亡ノ末(ドラゴン)を、末路夫妻(ハイアット)は殺すことができなかった。殺すべきなのはわかっていた。滅亡ノ末(ドラゴン)は人間を襲い喰らう。滅亡ノ末(ドラゴン)と人間は捕食者と被食者。生かしておけば、今は幼い敵対者は、いずれ巨大な翼で空を舞い、鋭い牙で人の血肉を貪るようになるだろう。誰よりも滅亡ノ末(ドラゴン)の恐ろしさを夫妻は知っていた。

だが、末路夫妻(ハイアット)は滅亡ノ末(ドラゴン)の子供の命を絶つことができなかった。

今まさに刃が向けられているというのに、まっすぐに見上げられた瞳に、覚悟を抱いた言葉に、夫妻は完敗した。多くの滅亡ノ末(ドラゴン)をその手にかけてきたはずの末路夫妻(ハイアット)は、それゆえに純粋な魂を壊すことができなかった。

戦わずして幼き滅亡ノ末(ドラゴン)に負けたのだ。しかし、子供とはいえ、滅亡ノ末(ドラゴン)をこのまま放置しておくわけにはいかない。殺すことのできなかった責任を果たすため、夫妻は滅亡ノ末(ドラゴン)と暮らし始めた。

そして――共に暮らし初めて幾年か経った。夫妻はその滅亡ノ末(ドラゴン)にウィッジと名付けた。

最初は、監視のつもりだった。だが、いつからか子供のいない夫妻にとって、ウィッジは実の子のような存在になっていた。

滅亡ノ末(ドラゴン)の成長は早い。小さな滅亡ノ末(ドラゴン)は、すぐに大きくなり、同じ家で暮らすのが窮屈になった。

それを悟ったかのように、ウィッジが人型をとるようになった。

けして、心通わすことも、わかりあえるはずもなかった。生まれながら捕食者と被食者のはずだった。

だが、その小さな家は、夫妻と小さな滅亡ノ末(ドラゴン)の住むその場所には、確かに家族が存在していた。

穏やかな日差しが降り注ぐ、肌寒い日のことだった。

リアは窓際のベッドに腰をかけ、腕の中の小さな命をあやしていた。両親には余り似ていない白金の髪がふわふわと浮いている。金の輝きを放つ瞳がリアを見上げていた。

暖炉の火が、ぱちりと音を奏で赤い花を咲かせた。

リアが柔らかな髪を撫でれば、赤子は楽しげな声を上げて笑う。細く頼りない指先がリアの指を掴み、金の色を持つ目が大きく開かれる。

エトワールとリアの間に子供が生まれたのは先日のことだ。小さいながら元気な男の子だった。その子供を、エトワールとリアはヒューと名付けた。

夫婦となって長い二人であったが、それまでの生活を思えば、子供を授かるうなどと考えもしなかった。

引退したあとも、命を奪い続けてきた自分たちには、子供を育てる資格はないと思っていたし、その頃には、ウィッジのことを実の子のように感じていたため、今更という考えもあった。

それを否定したのは、ウィッジだった。

「すべての生き物は、子孫を生み出すために存在する」

命は連鎖する。受け継がれなければ、命は終わる。繰り返しの中に、始まりと終わりが存在する。生まれなければ、その次に続く命も生まれない。

「命を奪い続けてきたというのならば、その分だけ、リアとエトワールには、命を繋いでほしい」

それは滅亡ノ末(ドラゴン)でありながら、人間と共に生きるウィッジが初めて二人に望んだこ

とだった。

リアは愛しさを隠そうともせずに、小さな赤子に触れる。優しい眼差しには、かつて血と肉の飛び交う大地を歩んできた頃の闇は浮かんでいない。

穢れの知らない無垢を抱く我が子に、世界の厳しさを知る母親は、ただ愛情を注ぐだけだ。

身重のリアに変わって、ウィッジは献身的に家事を引き受けていた。

子供が生まれてからも、ウィッジは家のことは一切リアにはさせなかった。あるいは、そうすることで、ウィッジは自身と赤子が接触するのを避けていたのかもしれない。

台所で、ヤギから絞ったばかりのミルクをウィッジは温めていた。煮立てないように火力を調整し、独特の匂いを消すために薬草を加える。そうして、湯気の立てるミルクをカップに移すと、ウィッジはリアに渡すため、寝室へと向かった。

寝室には、赤子をあやすリアの姿があった。柔らかな日差しの中にいる母親と子供。

ウィッジはその光景に思わず、足を止めた。

胸の奥がちりり、と痛んだ。カップを掴む指に力がこもり、爪先が陶器の表面を傷つけた。

脳裏に浮かんだのは、緋紺の雨の中、金の炎を纏い、息絶えた母親の姿。人を喰らい、それゆえ滅ぼされたウィッジの実の母。

人間にとって敵であっても、ウィッジにとっては優しい母だった。

しかし、ウィッジが生まれて間もなくして、その命を散らした。ウィッジが母親に甘えた記憶はほとんどない。ただ、その壮絶なる死は消えることのない残像として、鼓膜に焼き付いている。

「ウィッジ？」

リアが驚いた表情を浮かべていた。驚かせてしまうような顔を自分はしていたのだろうか。

いやな気持ちになって、ウィッジは目を逸らした。

リアはそんなウィッジの思いを察しているかのように、「ウィッジ」と呼んだ。

「おいで」

招かれるがまま、リアに近づく。

強張った指先からカップを引きはがすのに、時間がかかった。

カップを受け取ったリアはそれをベッドサイドに置くと、温かな手のひらでウィッジの手を包んだ。

リアはわかっているのだ。ウィッジの胸に宿ったものを。それは、末路夫妻(ハイアット)の心にも濃い陰を落としているのだろう。

「私たちのことを恨んでる？」

問いかけに、ウィッジは首を振った。

偽りはなかった。ウィッジの母親は、弱かったから死んだ。殺したエトワールにもリアにも罪はない。本心からそう思っている。

だけれど、殺された滅亡ノ末(ドラゴン)は、金の炎を纏い息絶えたのは、確かにウィッジの母だったのだ。

「私は、貴方のお母さんになれていないのね」

困ったようにリアは微笑んだ。ウィッジは否定することも同意することもできなかった。

困らせたいわけでも悲しませたいわけでもない。

ウィッジは、リアもエトワーも好きだった。自分の命を救ってくれた恩人。なにより、ウィッジが滅亡ノ末(ドラゴン)であることを知りながら、一緒にいてくれる。人間の好きという感情とは違うかもしれないが、ウィッジにとって二人に抱いている気持ちは「好き」と呼べるものでしかなかった。

「ねえ、ウィッジ」

真剣な眼差しがウィッジの顔をのぞき込む。

「もし、貴方が滅亡ノ末(ドラゴン)の中に帰りたいと望むなら、それでもいいの。貴方がいなくなるのは悲しいけれど、貴方はこの先もずっと生き続けるでしょう？」

リアは腕の中の赤子に目を落とした。生まれたばかりの赤子。だか、ウィッジは滅亡ノ末(ドラゴン)だから、この赤子よりも長く生きる。

誰かに殺されない限り、何百年も生き続けるのだ。いつか必ず別れがくることは分かっていた。喉の奥が震えた。何か言わねばと、ウィッジは口を開いた。

「……俺は」

言葉が切れた。

黙り込んだわけではない。小さな小さな指先が、ウィッジの長い髪を掴んだのだ。

金に輝く柔らかな瞳がウィッジを捉えた。きゃっきゃと、笑い声をあげる小さな赤子。両親の愛を受け、生きている小さな――愛しい命。

何が楽しいのかわからないが、ウィッジの長い紫黒の髪の一房をしっかりと握りしめ、その金の双眸にウィッジを映している。

どうしたら良いかわからず、ウィッジはおそるおそるといったように手を伸ばし、髪を掴む小さな手を引きはがそうとした。

ウィッジは、この赤子とどう接していいか、わからなかった。家事を一切引き受けていたのも、できる限り赤子と接触しないようにするためだった。

滅亡ノ末(ドラゴン)である自分が触れたら、壊れてしまうのではないか――エトワーとリアの子供を傷つけてしまうのではないか。そんな恐れが胸の奥に宿っていた。

引き離そうとする意図を察したのか、小さな手は髪を離し――今度はウィッジの指を掴んだ。驚いて、ウィッジは、その小さな指を振りほどこうとしたが、嬉しげな笑い声を立てられ、困惑の表情を浮かべたまま、固まる。

柔らかく温かい手だった。

生まれたばかりの赤子は、ウィッジの素性を知らない。ウィッジが滅亡ノ末(ドラゴン)であることも、滅亡ノ末(ドラゴン)とは何かさえ知らない。

――何も知らないのだ。誰かに守られなければ存在できない小さな命。その命が、今、自分の指を掴んでいる。

熱が体の奥から湧き上った。それが何だかわからず、けして不快ではないその感情に、ウィッジはもう一方の手を伸ばし、その柔らかな頬に触れた。

触れても――ヒューは壊れなかった。滅亡ノ末(ドラゴン)の手は小さな人間の子供を傷つけたり

はしなかった。

守りたいと思った。この小さな命を。かつて、エトワールとリアがそう願ったように、失わせたくないと思った。

「俺は、――俺は、この子の兄になってもいいのだろうか？」

無意識に吐き出された言葉。

その問いかけに、リアは目を大きく見開いた。表情が歪み、開かれた双眸から透明な滴が零れる。

「もちろんよ」

貴方はヒューの兄よ。リアの言葉に同意するように、赤子が甲高い声を上げた。

そして、ウィッジは、ヒュー・ハイアットの兄になった。

子供の成長は、種族に関係なく早いものなのかもしれない。エトワールはぼんやりとそんなことを思った。

ついこの間、生まれたとばかり思っていた息子は、いつの間にか走り回るようになっていた。

甘い金色の髪に、金というよりも銀に近い瞳。とろけんばかりの愛らしい笑顔を浮かべているのを見ると、思わず微笑みが零れる。

ちょろちょろと動き回り、一瞬たりともじっとしていない小さな息子の世話をしているのは、母親であるリアではなく、兄であるウィッジだった。

ヒューはウィッジのことが大好きなようで、ずっとウィッジのあとを追いついて回している。ウィッジは、最初は戸惑いを感じていたようだが、今では慣れた様子で弟の面倒を見ていた。端から見れば、仲の良い兄弟にしか見えなかった。

「に一、に一」

ヒューが兄を呼ぶ。ウィッジは足下にまわりつくヒューを抱き上げた。

けらけらと楽しげに笑うヒューと、無表情ながら弟の面倒を熱心に見ているウィッジを見ると、心の奥がほっと温くなる。

間違っていなかったのだ。

あの日、幼い滅亡ノ末(ドラゴン)を救ったことは、間違いではなかった。

失った腕の傷口を撫でる。

腕と目を対価にして得たものは、あまりにも大きく掛け替えのないものだった。

あのころ、滅亡ノ末(ドラゴン)を退治して旅をしていた頃にはけして描けなかった幸せが目の前にあった。

妻と子供たちとの平和な生活。

世間では、滅亡ノ末(ドラゴン)による残虐にして残酷な事件が絶えない。だが、どうだろうか。目の前にあるのは、人間と滅亡ノ末(ドラゴン)が手に手を取り合って暮らす生活ではないのか。

滅亡ノ末(ドラゴン)は人間の血肉を食らう。人間は彼らにとって餌でしかない。しかし、ウィッジは、エトワールたちと同じものを食べ、同じ生活をしている。そこには、いがみ合う理由など存在しない。

「いつか、分かり会える日がくると良い」

長い間、刃を重ねてきた二つの種族が手を取り合える日がくるかもしれない。そんな希望が確かにあった。

その日のことを、ウィッジは生涯忘れないだろう。

ウィッジは幸せだった。エトワールとリア。幼い弟。

自分が何者であるかなんて関係なかった。なんであっても構わなかった。この生活がずっと続くと思っていた。

それが、簡単に壊れるものであることを、ウィッジは知らなかった。

「はっ、はっ、はっ」

短い呼吸が繰り返される。否、呼吸しているつもりだが、肺に空気は流れていかない。熱い液体が口の中に満ちていくのを感じ取っていた。

不思議と、痛みはなかった。大量の血液を失っているせいか、意識が朦朧としている。体温が急激に下がり、そう遠くないうちに、命を落とすことになるだろう。

腰から下は存在せず、弾けた内臓が地面に溶け出している。

千切れた下半身が、咀嚼されているのが見えた。この身を二つに切り裂いた主は、喰らい取った足を、音を立てて噛み砕いている。禍々しい牙の隙間から赤黒い液体がしたたり落ちた。

それが食べ終われば、次は上半身の番だ。もっとも、その恐怖を味わう前に、この身は息絶えることになるだろう。それが幸いなことなのかは、わからない。

死を目の前に、パニックになることもなく、冷静にそんなことを想った。

薄れていく意識の中、脳裏に浮かんだのは、いとしい妻と子。そして、共に暮らした幼い滅亡ノ末(ドラゴン)。

妻は無事に逃げられただろうか。息子たちを逃がすことができただろうか。

「ウィッジ、ヒュー……」

子供など一生得ることはないと思っていた。血に塗れた手では、何も抱けないと思っていた。道士(レイン)であったことは誇りだった。人々を守ることは使命だった。だが、一方で滅亡ノ末(ドラゴン)を殺す自分と、人間を殺す滅亡ノ末(ドラゴン)は何が違うのか――そんな問いがいつも胸にあった。だから、生き物としての幸せを掴むことは、許されないと思っていた。

それを否定したのは、この手が殺めた滅亡ノ末(ドラゴン)を母親に持つ子供だった。

命を繋ぐことに意味があると、奪った分だけ生かせと、そう告げた――息子。そうだ、彼も息子だ。今、この命を奪おうとしているモノの同じ種族だけど、彼は間違いなく、自分の息子だった。

誰よりも愛しい守るべき息子たち。

「ウィッジ、ヒュー、お前たちを――」

誰にも届かない言葉は、喉の奥に消えた。色の失った唇が震え、瞼が痙攣した。

そして、エトワール・ハイアットは息絶えた。その顔に浮かぶのは、穏やかな笑みだった。

末路家族(ハイアット)が住む岩場の近くの集落が滅亡ノ末(ドラゴン)に襲われたのは、ヒューが九歳になった年だった。集落の人を救うため、エトワールとリアは、倉庫に仕舞われていた対滅亡ノ末(ドラゴン)用の武具を身に纏うと、ウィッジにヒューを任せて、出ていった。

ウィッジも共に戦うといったが、エトワールは首を縦に振らなかった。

ウィッジは、ずっと人型をとっており、自分以外の滅亡ノ末(ドラゴン)と接触したことがない。幼くして、滅亡ノ末(ドラゴン)とはかけ離れた生活を余儀なくされたウィッジにとって滅亡ノ末(ドラゴン)は未知の存在のはずだ。

それに、人間の世界で暮らすウィッジを、他の滅亡ノ末(ドラゴン)たちが良く思うはずはなく、真っ先に狙われることは目に見えている。ウィッジを危険に晒すことはできない。

退いたとはいえ、末路夫妻(ハイアット)は日々の鍛錬は欠かしていなかったし、最盛期ほどではないにしろ、引けをとることはないはずだった。だからこそ、二人はぐずるヒューにすぐ戻るかからと告げて、出て行った。

すぐに、戻ってくるはずだった――集落を襲った滅亡ノ末(ドラゴン)が一体だけだったのなら。

三体もの滅亡ノ末(ドラゴン)が集落を襲った。誰もその傍若無人を止めることができず、滅亡ノ末(ドラゴン)は思うまま集落を蹂躪し尽くした。

「に一さん。おとうさんと、おかあさん、おそいね」

赤い雨が降っていた。

窓の外を不安そうにヒューは見つめていた。ヒューは滅亡ノ末(ドラゴン)を見たことがない。その恐ろしさを何も知らない。ただ、いつもと様子の違った両親の姿に戸惑いと不安を感じているのだ。

怯えたような表情を浮かべる弟の肩を、ウィッジは優しく抱き寄せた。

「大丈夫だ。もうじき戻ってくる」

不安だったのは、ウィッジも一緒だった。なんとなく、嫌な予感がしていた。だが、あの二人はウィッジの母さえも破った強者だ。そう簡単に何かあるとは考えられない。

窓の外には赤い雨が降っている。あの日――ウィッジの母親が死んだ人も緋紺色(グリムレッド)の雨が降っていた。

胸の奥の靄を掻き消すように、ウィッジは弟の頭を優しく撫でると、

「おやつにしよう」

「うん」

小さな弟の手を引いて、台所に足を向けたそのときだった。

窓の外に紅い稲光(レッドロール)が走った。大地を揺るがす轟音が耳を叩き、思わずヒューが肩を震わせた。

「ウィッジっ！」

叫び声と共に、扉が勢いよく開かれ、雨が吹き込む。赤い滴は床に大きな染みを描く――雨にしては濃い赤が広がる。

「逃げなさいっ！」

飛び散った赤い液体。

扉を開け放ったのはリアだった。その顔は蒼白を通り越して、もはや色がなかった。青くなった唇から赤い液体を吐き出し、鼻からも止めどなく命の証が流れ出ている。

「リアっ！」

飛び込んできたのは、赤く染まったリアだった。ウィッジは啞然とした。

リアは、左肩がなかった。柔らかな肉の断面と白い骨が露わとなり、全身が赤黒く染まっている。リアが動くたび、露出した筋肉が収縮し、どこから生まれるのか赤い液体が珠を作って流れ落ちる。

けして美人とはいえないが愛嬌のあった顔は、頬の肉ごとえぐり取られたのか、原型を留めていない。

右手で押さえている腹部から、淡いクリーム色の内臓が漏れ出し、ねばついた粘液を吐き出している。

母親の血塗れの――変わり果てた姿に、ヒューは火がついたように泣き出した。

リアは苦痛に歪んだ厳しい表情で、ウィッジを見た。

「逃げなさい！」

それだけを言うために、瀕死の重傷を追いながらもリアは戻ってきた。

集落を襲った滅亡ノ末(ドラゴン)は、人間の味を知っている。集落の人間を貪り食った後は、間違いなくここに来る。

だから、その前に、我が子を逃がすためにリアは戻ってきた。リアを行かせるために、エトワーは自ら囷となり、崩れそうになる身体を叱咤し、強引に動かしてリアは戻ってきたのだ。

「ウィッジ、ヒューを連れて……」

血反吐と共に吐き出された言葉が途絶えた。

黒い陰が空を覆った。褐色の巨体がリアの背後に落ちてくる。逃げたリアを追ってきたのか、それとも集落はあらかた食い散らかし終えたのか、巨大な滅亡ノ末(ドラゴン)が姿を現す。

リアは血の気が失せ、自由にならない体を引きずりながら、滅亡ノ末(ドラゴン)に対峙する。母親として、してやれることはもうないことを、リアは知っていた。幼い息子の傍にいてやることはできない。幼い息子を守ることは、自分にはできない。だからこそ――。

「リアっ！」

「ウィッジ……。ヒューをお願いね」

リアの手から放たれた雷は、滅亡ノ末(ドラゴン)の鱗に弾かれた。

鋭い牙が生えた口がリアに迫り、上半身を食らった。だが、リアは諦めなかった。最後の力を振り絞り、凶悪な口内で雷を放つ。

滅亡ノ末(ドラゴン)の口の中で爆発が起こり、リアの血が周囲に降り注ぎ、肉片が飛び散った。大きく穴があいた壁から温かい雨が吹き込み、家族の団欒の場所であった居間を汚した。

ヒューの鳴き声がやんだ。母親の死を目の前にヒューは目を見開き、音にならない叫びを放っている。

ウィッジは、視界が真っ赤に染まるのを感じた。

滅亡ノ末(ドラゴン)の口から煙が立ち上る。だが、それだけだった。命を賭して放った一撃は、滅亡ノ末(ドラゴン)の動きを一瞬止めただけに過ぎなかった。それは、逃げるにはあまりにも短い時間だった。

煙が消えた後、淀んだ青い眼が、ウィッジを捉えた。その、突き刺すような視線にウィッジは身体を強張らせた。

「おまえは……」

滅亡ノ末(ドラゴン)が口を開いた。どろどろと、リアの血が牙の間から零れ落ちる。

「我が同族よ。なぜ、そんな矮小な生き物の姿をしている？」

「な、にを」

「弱く愚かな種族を真似してなんとする」

どんな姿をしていても同族であることはわかるのだろう。滅亡ノ末(ドラゴン)は人の姿を取るウィッジを不思議そうに見ている。

そして、言う。偉大なる我らの姿に戻れ、と。

滅亡ノ末(ドラゴン)にとって、人間は食糧(エサ)だ。食糧(エサ)である下等な生き物の姿を取るのには、誇り高い滅亡ノ末(ドラゴン)として信じられないのだろう。

「ひやっ、ひきゃっ」

小さく甲高い悲鳴に似た声が、雨音に紛れて響く。

その音は呼吸に合わせて、ヒューの口から発せられていた。虚ろな瞳は、目の前の捕食者を見ていない。足だけを残し、大地に倒れている母親だったものを映している。

滅亡ノ末(ドラゴン)の眼差しは、痙攣したように身を震わす、ヒューを捉えた。ぎょろりとした瞳が細められる。

咄嗟に、ウィッジは滅亡ノ末(ドラゴン)とヒューの間に立ちふさがった。その視線を遮るように立ち位置を変えたウィッジに、滅亡ノ末(ドラゴン)は唸りをあげる。

「その人間の子供を寄越せ。人の子の血肉は美味なりー」

真っ赤な口から、言葉と共にリアの肉片が落ちる。

リアを食らった上で、ヒューまでを食らうという、滅亡ノ末(ドラゴン)の言葉に――頭の奥がしびれるような痛みを感じた。

滅亡ノ末(ドラゴン)にとって、人間が食料であることは、理解していた。だが、滅亡ノ末(ドラゴン)にとって人間が食料だったとしても――。

「さあ、寄越せ！」

「ヒューをお願いね」

リアの最後の言葉が頭の中で反復する。

それは、怒りか悲しみか。

ウィッジには分からなかった。

「誰が、誰が、渡すものか！ 弟(ヒュー)は、絶対に渡さない！」

肉が弾けるのを感じた。身に纏っていた衣服が風に舞い、消えた。

骨がぎしぎしと音を立てて歪み、肉の質量が増し、皮膚が崩れ、固い鱗が形成される。背中が割れ、大きな翼が広がり、淡く透ける被膜が金のきらめきを宿して震えた。

全身を包むは、黒紫の鱗。緋色の瞳には怒りと憎しみが燃え上がり、鋭い爪が空を切り裂く。

目の前の滅亡ノ末(ドラゴン)はウィッジを敵対者と認識し、咆哮する。それに応えるように、暗雨雲の向こうから、集落を襲っていた残りの二体の滅亡ノ末(ドラゴン)が姿を現す。

「われらに敵対するとは、愚かなり！」

ウィッジはそれには答えず、黒紫の翼を広げ、三体の滅亡ノ末(ドラゴン)に向かって大きく口を開けた。

戦い方など知らないはずだった。だが、ウィッジの本能はそれを知っていた。

三体の滅亡ノ末(ドラゴン)と、一体の滅亡ノ末(ドラゴン)が激突した。

「あはは、あはは、あはは」

いつの間にか、雨はやんでいた。

赤く染まった岩肌に、ヒューは座っていた。うつろな眼差しが大地を映し、乾いた意味のない笑いが口から漏れていた。

「あはは、あはは、あはは」

それしか、できないというように、ヒューは笑っていた。無邪気とはほど遠い笑みで。

ウィッジは無言で弟と、壊れた小屋を見つめていた。家族で暮らした小屋は消えた。

エトワーマリアも死んだ。

残ったのは、壊れたヒューだけ。

滅亡ノ末(ドラゴン)の死骸はない。ウィッジが鋭いその牙で噛み付いたその瞬間、塵となって消えた。

ウィッジは何も知らなかった。だが、滅亡ノ末(ドラゴン)としての本能は、その牙に喰らいついたものを塵に返す毒が宿っていることを知っていた。

しかしだ。そんなことは、何の意味もなかった。

ウィッジが集落を、エトワーマリアを殺した滅亡ノ末(ドラゴン)を倒しても、何も戻らない。何度呼びかけても、ヒューは正気を取り戻さない。

たった一人の弟さえ、救えない。

「ヒュー」

ウィッジにはどうすれば良いか分からなかった。だが、どうするべきか分かっていた。

「ヒュー」

反応のない弟の前に回り込み、その肩を掴む。乾いた笑い声が響く。

ヒューの眼差しには、兄は映っていない。ヒューの心は粉々に砕け、原型を留めていない。ここにいるヒューは、ヒューであってヒューではない。だが、ウィッジにとっての弟は、ヒューだけだった。

「滅亡ノ末(ドラゴン)を滅ぼそう」

ウィッジは一言言った。

「父さんと母さんを殺した滅亡ノ末(ドラゴン)を、滅亡ノ末(ドラゴン)という種族を殺そう」

その言葉に、ヒューは笑うのをやめた。

瞳に光りが、狂気の光が宿るのを見た。

「滅亡ノ末(ドラゴン)を殺すの？」

「そうだ」

「全部？」

「そうだ」

ヒューは笑った。無邪気な笑みを浮かべた。

先ほどまでのとは違う、意思のこもった笑みだった。

「うん、全部殺す」

笑顔に反する残酷な言葉が、ヒューを救った。

ウィッジは弟の小さな肩を抱く。掻き抱く。強く、強く、抱きしめる。

ヒューは痛みを訴えることなく、それを受け入れる。痛みというものを感じていないのかもしれない。

ウィッジの母親が死んだのは、弱かったからだ。

だから、エトワールとリアを憎むことなかった。

エトワールとリアが死んだのも、弱かったからだ。

だけど、自分はエトワールとリアを殺した滅亡ノ末(ドラゴン)が憎かった。

ヒューを壊した滅亡ノ末(ドラゴン)が憎かった。

「俺は滅亡ノ末(ドラゴン)であることをやめる」

ヒューに聞こえないようにつぶやく。それは決意だった。

「俺は、ウィッジ・ハイアット」

滅亡ノ末(ドラゴン)を滅ぼそう。そのために、末路(ハイアット)になろう。弟を取り戻すために、己の種族を裏切ろう。

「行こう、ヒュー」

壊れてしまった弟を思う。すべての滅亡ノ末(ドラゴン)を殺せば、きっとヒューは以前のヒューに戻る。そう信じて。

弟の手を握り立ち上がらせる。

そして、末路兄弟(ハイアット)は歩き出した。すべての滅亡ノ末(ドラゴン)を殺すために。

数年ののち、末路兄弟(ハイアット)の名は道士(レイン)の間で知らぬものがない存在になっていく。

だが、彼らの歩む先は、どう足掻いても抜け出すことのできない――末路だけなのだろう。

「末路＞末路 完」

末路兄弟

<http://p.booklog.jp/book/36136>

著者 : PLUMERIA

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/plumeria18910/profile>

作成者サイト : PLUMERIA <http://plumeria.dayuh.net/>

- ・ 末路兄弟 2011/5月某日 無料配布本「DRAGON」収録
- ・ 末路>末路 2011/10某日 電子版用書き下ろし

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36136>

または、サイトまで。

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36136>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.